

羽生市立三田ヶ谷^{み た か や}小学校の概要

本校は、羽生市の市街地より東北部に位置し、北に利根川、学区内を南北に東北自動車道が走っている。羽生インターチェンジからは、広い校地と豊かな自然環境に恵まれた本校の校舎と赤い屋根の体育館が目に入る。また、近くには、県立さいたま水族館を含む羽生水郷公園や、食虫植物「ムジナモ」が自生する国指定天然記念物「宝蔵寺沼」があり、学校周辺は田畑に囲まれており自然環境に恵まれた地域にある。



三田ヶ谷地区は、水郷公園や宝蔵寺沼等から想像できるように、地質学的には「加須低地」に属し、特に学区南部は湿地帯（低地）が多かったようである。このため、稲作に適さないこの地域に着目して養魚池を作ること考えたのが本地区の「松本伴七郎氏」であり、1878(明治11)年に“鯉魚養育会社”を設立して鯉の養殖を始めた。これが日本で最初の養魚発祥となった。さいたま水族館が当地に出来たのもこのことに由来しているといわれる。

更に、本地区は明治の文豪田山花袋の小説「田舎教師」“四里の道は長かった。その間に青縞の市のたつ羽生の町があった。・・・”の舞台ともなった地域でもあり、現在も資料館や記念碑等が現存している。（舞台となった弥勒高等小学校は廃校）



また、東日本大震災後TV等のCMで全国的に有名になった詩「行為の意味」“心は見えないけれど 心づかいは見える。 思いは見えないけれど 思いやりは見える”の作詩者、詩人「宮澤章二」先生の出身地でもある。（県内300校以上の校歌を作詩。シングルベルの訳詞者でもある）本校では、宮澤章二先生の業績を顕彰する意味で、平成25年1月23日に「宮澤章二記念館」をオープンした。



政治家としては、現市長（河田晃明氏）を含め2人の市長を輩出している地域でもある。このように、三田ヶ谷地区は豊かな自然と文化の漂う地域であるといえる。

三田ヶ谷地区の住民の多くは土着の人達であり、三世同居の家庭も多いこともあって、三田ヶ谷村（三田ヶ谷地区）唯一の学校としての三田ヶ谷小学校に寄せる期待は大変大きいものがある。また、市内では村君地区に次いで少ない世帯数ながら、市民体育祭において常に上位（優勝）を目指すなど、地域住民のまとまりは大変強いものがある。このことからわかるように、保護者や地域の人々の学校教育に対する関心は高く、しかも協力的である。PTA活動も、除草作業年1回、資源回収年2回、広報誌発行年3回などと活発である。

このような地域に住む子ども達は、明るく素直で男女とも大変仲の良いのが特徴である。しかし、小規模校である故に競争心・向上心が育ちにくい面もある。従って、三田ヶ谷小学校として、小規模校の特長を活かし、小規模校でなければ出来ない活動を創意工夫しながら競争心・向上心を育てる教育活動を推進する必要がある。



学校の歴史は古く、明治6年4月に蓮台寺を借用して開校された。その間、三田ヶ谷村と大越村（現加須市）が合併したために学校が分校になったこと等で、校名が何回か変更されながら昭和22年三田ヶ谷村立三田ヶ谷小学校に改称された。現在地に移ったのは、昭和33年である。（旧三田ヶ谷中学校跡地）昭和38年5月27日の新校舎（増築）落成日を記念してこの日（5月27日）を開校記念日としている。児童数は、戦後第一次ベビーブーム時代（昭和33年）の594名を境に年々減少し、現在（平成25年度）児童数123名7学級（特別支援学級1）の小規模校となっている。それに伴い、小学校の運動会と地区の体育祭を合同で実施する「ムジナモコミュニティ体育祭」を行っている。

